

Thymic lesions in patients with myasthenia gravis : Characterization with thallium 201 scintigraphy

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15683

学位授与番号	医博甲第1499号		
学位授与年月日	平成14年3月22日		
氏名	樋口隆弘		
学位論文題目	Thymic Lesions in Patients with Myasthenia Gravis: Characterization with Thallium 201 Scintigraphy (重症筋無力症患者における胸腺病変：タリウムシンチグラフィによる評価)		
論文審査委員	主査	教授	渡邊 剛
	副査	教授	中尾 眞二
		教授	森 厚文

内容の要旨及び審査の結果の要旨

重症筋無力症はアセチルコリンレセプターに対する自己免疫反応により生じる神経筋接合部異常を病態とする。過半数例において胸腺腫や胸腺過形成（過形成）の胸腺異常を呈する。治療は胸腺摘出術が広く行われている。過形成では治療への反応は良好であるが胸腺腫では不良であること、過形成では低侵襲手術の適応となることから術前の胸腺組織の正確な診断が求められている。CT検査（CT）による診断は過形成には胸腺の肉眼的肥大を伴わない例が多いこと、胸腺腫と類似の結節タイプが存在するなどにより鑑別診断は困難である。本研究の目的は細胞の機能を反映するタリウムシンチグラフィ（タリウムシンチ）を行い定量測定することにより、重症筋無力症患者における胸腺病変の診断が可能であるかCTと比較し明らかにすることにある。

重症筋無力症の診断にて胸腺摘出術を施行した46名を対象として、術前にタリウムシンチ及びCTを行った。Tl-201を111MBq静注し、15分後（early）、180分後（delayed）に3検出器型ガンマカメラを用いてデータ収集し逆投影法で再構成し断層像を作製した。タリウム集積の評価は体軸断層像で胸腺部の関心領域と肺野の関心領域とのカウント濃度比を算出して定量的に行った。摘出組織にて、正常胸腺19例、過形成16例、胸腺腫11例であった。組織型におけるタリウム集積比の平均値は、正常胸腺、過形成、胸腺腫がearly像でそれぞれ、0.96, 1.14 及び 1.87、delayed像で1.09, 1.65 及び 2.03であった。正常胸腺と比較して、過形成ではdelayed像にて集積の増加 ($p < 0.001$) を認め、胸腺腫ではearly像、delayed像ともに集積の増加 ($p < 0.001$, $p < 0.001$) を認めた。タリウム集積比が、early像にて1.5未満、delayed像にて1.4以上の場合には過形成、early像にて1.5以上、delayed像にて1.4以上の場合には胸腺腫とする診断基準を設けてCTと比較し検討すると、正診はタリウムシンチで40/46例 (87%)、CTで32/46 (70%)であった。過形成での正診はタリウムシンチで13/16例、CTで5/16例であり、有意にタリウムシンチが優れていた ($p = 0.006$)。

以上の結果から、タリウムシンチにより重症筋無力症患者において正常胸腺、過形成、胸腺腫の鑑別が可能であることが示された。

本研究はタリウムシンチが重症筋無力症患者の胸腺病変の診断に非常に有用であることを初めて示した価値ある労作と評価された。